＜実践報告・調査報告＞

京都産業大学附属高等学校「人間力講座」の実践報告
―人間関係の質を高め、課題解決と情報発信能力の向上を目指して―

中尾　健二[1]

京都産業大学附属高等学校では大学での学びにつながる授業を展開したい、夢を形にするために答えのない問いの前に立ち続ける姿勢を涵養したいという思いからプロジェクト型学習の授業「人間力講座」を実施している。ここでいう「人間力」とは「人と人の間に入っていく力、何かを為す力」、つまりよりよい社会、より幸福で平和な社会の創造に向けて現状の課題の克服に積極的に寄与していける力を指して言う。こうした力を育成していくために就業観、公共観を育み、実践的な課題発見、解決能力を養うプログラムを準備し（講義、グループ討論、調べ学習、フィールドワーク、プレゼンテーション、レポート作成等）、大学での学びと現代社会とを直結させていく主体的な学習に力点を置いた授業を実施している。本稿では講座が開講された2015年度から2019年度までの5年間における実践をまとめ、その到達点と課題について報告する。

キーワード：人間力、地域連携、社会連携、PBL、協働学習

1. はじめに

1.1 「人間力講座」の設置

京都産業大学附属高校KSUコース（京都産業大学への進学を前提に大学での学びにおいて必要となる資質を磨くコース）では2007年度の開校以来、2014年度までは形を変えながらも高校2、3年生時にそれぞれ高大接続授業[1)]が設置されていたが、2015年度からは諸事情により3年生時にのみ行われるようになった。こうした状況下、空白となった2単位時間（50分×2回）を大学での学びにつながる授業を展開したい、夢を形にするために答えのない問いの前に立ち続ける姿勢を涵養したいというKSU部（KSUコースの運営を担当する部署）の思いから2015年度から2年生KSUコース社会系・国際系クラスに在籍する生徒を対象に学校設定科目[2)]としてプロジェクト型学習（Project Based Learning：PBL：課題解決型）の授業「人間力講座」が設置されることになった。

ここでいう「人間力」とは、「人と人の間に入っていく力、何かを為す力」、つまりよりよい社会、より幸福で平和な社会の創造に向けて現状の課題の克服に積極的に寄与していける力を指して言う。そうした力を育成していくために就業観、公共観を育み、実践的な課題発見、解決能力を養うプログラムを準備し、大学での学びと現代社会を直結させていく主体的な学習に力点を置くことを授業の目的とした。

1.2 授業の運用

2015年度から2017年度の3年間の授業は、NPO法人グローカル人材開発センター[3)]（以下、グローカルセンター）が授業案の作成及び授業の中心的役割を担い、高校の担当教員（担任、学年部長、KSU部長等）は授業案へのレスポンス及び授業を行い、成績をつけるという形態で運用された。また、大学生スタッフが授業に関わった。授業はクラスを基本単位として合同クラス（2～3クラス合同で1講座）を編成し、同一時間帯に2講座を開講する形で展開した（週1回、1単位時間50分×2時間連続で実施）。年次により異なるが授業前または授業後に毎回三者で当日の授業の打合せや振り返りを行った。

3年間の取り組み後、2018年度の授業は高校の担当者が企画段階から授業に関与するようになり、2019年度に至っては授業の企画・立案、実践等は、ほぼ高校の担当教員が行った。

本稿は当初、2019年度の取り組み（下京区140周年記念表彰、第16回京都私学振興会賞受賞）について報告する予定であったが、その取り組みの成果と課題は2015年度にはじまる過去4年間の取り組みの上に成立したものである。2019年度の

[1] 京都産業大学附属高等学校

取り組みへと至るまでの受講生の授業評価（感想）と担当した教員の授業をより良いものにしたいという葛藤の記録を述べることなしに単年度の取り組みについて論考することで「人間力講座」の授業成果や課題を明らかにすることはできないため、5年間の取り組みについて報告する。

2.「人間力講座」の取り組み（2015 ～ 2017 年度）

2.1　2015 年度の取り組み

KSU コースでは、3年生時から国際系、社会系に分けて（理工系は2年生時から）カリキュラム編成していることから、授業はそれぞれの系統に関連する内容とし、2講座を学期ごとに交互に調査・報告させ（1学期に国際系の内容を学んだ生徒は、2学期に社会系の内容を学ぶ）、進路選択の一助とすることも授業の目的の1つにした。

国際系では1学期あたりの授業を2部構成とし、前半部で京都の文化について調査を行い留学生に対して発表した。また、後半部で島原または京都御苑へのフィールドワークを行い生徒間で発表した。授業はグループワークの形式を取り入れ、講演会聴講（写真1）、フィールドワーク、ブレーンストーミングによるアイデアの創出、KJ 法による課題整理、まとめを行い、最後に全体発表という順序で行われた。

写真 1.　島原太夫による講演の様子（むすびわざ館ホール）

社会系もまたグループワークの形式を取り入れ、学期を通して、企業調査、依頼状の書き方や訪問マナーを学ぶ講座、企業訪問、まとめを行い、最後に全体発表という順序で行われた。

3学期は授業回数が十分に確保できない中で「グローバル社会と私」をテーマに様々な世界のランキングについてクイズ形式で学ぶ授業を展開した上で、世界の現状について興味関心のあることをグループで調べ、教室内で発表する取り組みを行った。最終授業では1年間の取り組みの中で印象的だったもの、得たものについて1人1分間のスピーチをさせた。以下、私の手元に残っているメモからいくつかを紹介する（図1）。

①企業訪問が印象的。行ってみることが大事。ネットで検索すればでてくるが、それよりも多くの情報が得られた。
②企業訪問がよかった。銀行の裏側を初めて見た。これをどうやってみんなに伝えらたらよいのかチームでまとめるのが大変だった。
③やらないといけないのでやるしかなかった。でも、やってみて得るものはいっぱいあった。人と対話することが大切だということを学んだ。
④「人間力」の授業で何をするのか疑問であったが、授業では聞く力、話す力、行動力が高い人は社会で活躍している気がした。
⑤作業をする人としない人とがいる。何度もイライラした。効率が悪いと思った。1つの物事を達成するためにチームがまとまることは難しい。でも、多様な意見が聞けることは良いことだ。伝えられる自分になった。

図 1.　1分間スピーチの内容（一部。中尾メモより）

生徒の学びの視点から見たとき、これらの発言から講座設置の目的は達せられているように思われる。また文部科学省が「高等学校学習指導要領」（2018 年告知）で述べている「主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々と協働を促す教育に努めること。」「学びに向かう力、人間性等を涵養すること。」や中央教育審議会大学分科会大学教育部会が「今果たすべき学士課程教育の役割」で述べている「高度成長社会では均質な人材の供給を求めた産業界や地域が今求めているのは、生涯学ぶ習慣や主体的に考える力を持ち、予測困難な時代の中で、どんな状況にも対応できる多様な人材である」「主体的に考える力を持った人材は、受動的な学修経験では育成できない。（中略）学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）によって、学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛える双方向の講義、演習、実験、実習や実技等の授業を中心とした教育である。」（「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」（2012 年 3 月 26 日）と連なる授業であったことも、読み取ることができる。

一方、担当教員の学びも多く、授業導入時にはアイスブレイク（発言しやすい環境をつくる取り組み）を、授業終了時には振り返りを行うという手法やグループワーク学習における付箋紙を用いたブレーンストーミングやKJ法は、教師主導の一斉講義型授業が多い高校において新鮮なものであった。これらの手法が情報の可視化、共有化、構造化を助け、生徒たちのメタ認知能力を高めるとともに、学びの深化を図るための有効な手段であることを学んだ。

しかし、有効な手段と理解しながらも学びの質の深化が十分に図れなかったことは課題としてあげられる。国際系の生徒の報告は、インターネットからの引用ばかりで個性的なものはなかった。また、社会系の生徒による調査報告に際しては、内容が小学校の社会見学の領域を超えておらず、受動的な（聞き手に徹した）ものが多かった。さらに課題をあげれば、こうした授業スタイルに教員は不慣れであるうえ、グローカルセンターとの打合せ時間も十分に確保できなかったこともあり、生徒の学習行動に対応できない場面があったことがあげられる。グループワークに関して、1グループあたり7人と人数が多かったこともあり、生徒の中には自分自身が所属するグループの中で活躍する場面を見出せず、他のグループの同じようなメンバーと雑談し、発表時にのみ自分の班に参加するといういわゆる「フリーライダー（集団の利益にただ乗りする者）」が散見されたことも課題であった。

2.2　2016年度の取り組み

2016年度は、授業運営に関わる諸々の問題から、国際系・社会系という枠組みを取り払い通年の授業として実施することになった（以降、継続して国際系・社会系を問わず授業を実施）。2015年度の「学びの質が深まっていない」という反省もあり、学期ごとに目標を定めて取り組みを行うことにした。1学期には「生徒同士の関係の質を高める（教室内のコミュニケーション）」ことに力点を置き、毎回チェックイン（グループワークを行う前に自分の思っていることを話し聞いてもらうことで、会議をしやすい環境をつくる）やアイスブレイク、振り返りを行った。続けて、ペアインタビュー、ファシリテーショングラフィック、ブレーンストーミング、KJ法、ワールドカフェ、ジョハリの窓といった手法について学ぶ取り組みを行い、学期末に「人間力」とは何かについてグループごとに発表をさせた。

2学期には1学期に身につけた技法をもとに「学びの場を教室外に広げ、主体的に動く（教室外でのコミュニケーション）」ことを目標にグローカルセンターが二条界隈活性化プロジェクト（のち朱雀共同計画と名称変更）や教業学区自治連合会から依頼を受け、本校と協働で授業を行うことになった。結果、「朱雀地域活性化のために高校生ができることは？」をテーマに現地調査を行い、「高校生がオススメする！二条界隈のおもろいとこポスター」を作成し、三条会商店街にあるSWEET CAFÉ KYOTO KEIZOで展示を行った（写真2、図2）。展示会場ではポスターセッションも行った。

写真2.　展示会場の様子

仏壇には入りたくないが
この店の中には入りたい
-170年の伝統-　栗山三佛堂

図2.　栗山三佛堂を紹介するポスター

3学期には「多様な情報をつなげて全体のつながりを考える（外側と内側とのつながりを発見する）」ことを目標に身近なことから世界につながる取り組みを行い、最終回に京都産業大学世界問題研究所の東郷和彦先生による「think for yourself 国同士のバランスは自分で（自分事の問題として）考える」という講演を聴講して終了した。

2.3　2017年度の取り組み

2017年度は2016年度の授業内容をほぼ踏襲する形で行った。但し、すでに高校2年生になっており、他の学校行事等の取り組みもあるなかで「生徒同士の関係の質を高める」ために1学期の授業時間全てを費やす必要があるのかという疑問や2学期に行った「学びの場を教室外に広げ、主体的に動く」時間が十分に確保できなかったことから、1学期の取り組みのうち後半の3分の1を2学期に向けた準備に充てることにした。

2学期の取り組みは、2016度の取り組みとの違いとして、特定のスポットを紹介するのではなく、何らかのテーマに基づいて三条界隈に存在するものをマップやミニコミ誌にまとめ、地域間のつながりや高校生自身と三条界隈とのつながりに広がりをもたせることを目標とした。生徒は3度にわたるフィールドワークとインターネットによる調査により、成果物（写真3）を作成したが個性的なものはわずかであり、朱雀共同計画からも厳しく批判された。しかし、よく考えてみれば三条界隈は多くの生徒にとって見ず知らずの地域である。3回の現地調査だけで地域の魅力を発見し、テーマを決め、活性化するための成果物をつくるという課題設定に問題があったのだろう。また、朱雀共同計画も教育的というよりは商業的利益を求めるために高校生を活用するという視点が強く見られた。さらに、当時の学内にはパソコンの使用環境が整っておらず（7人程度のグループに1～2台のパソコン）、また、マップやミニコミ誌を作成するためのパソコンソフトは特定の教員にしか扱えないものだったということもあり、「フリーライダー」が目立つようになった。授業が生徒のためになり、力がついたものになっているのかという疑問が教員間に生じはじめていた。溝上（2004）は「問題は学生たちに仕事や人生について考えさせたいという取り組みの意図はわかるとして、果たして考えさせられたかどうかということである。」と述べている。

写真3. ポスター「Gentleman　～大人ぶらり～」

3学期についても例年通り身近なことから世界につなげるグループワークを行い、最終回に東郷先生に現代世界における疑問を投げかけ、回答していただく機会を設けた。印象的であったのは「AIが発達してくる中で自分の存在（広い意味で人間の存在価値）が失われるのでないか」という生徒の質問に対して、「革命と恋に生きてきた自分にとってAI等恐れるに足らず」という返答であった。「人間はうまくいかないことがあれば、どうすればうまくいくようになるのかを考える。AIは与えられたことにしか対応できない」という趣旨の発言であろう。2017年度の人間力講座の締めくくりにふさわしい言葉であったように思われる。

2017年度は、年度末に受講者を対象にアンケートを実施しており、夏に理系クラスに在籍している生徒を対象に実施している「サイエンス講座」を含めたアンケート結果（表1）がある。「講座を受講してためになったと思いますか」という問いに対して、「強くそう思う」「思う」という回答が併せて約63%あり、生徒が授業をある程度肯定的に受け止めていることが分かる。「特に興味深かったのはどの内容でしたか」という問いについて、「フィールドワーク」という回答が約37%と高いが、その前後の取り組みについての回答率は高くない。「まとめと発表」の回答率も高くないことは、一連の取り組みとしてとして捉えたときに、学びが一過性のもの（単発的取り組み）になって

表 1. 2017 年度高大接続アンケート（2 年）より

【全体】　１８４件（無回答１名）

		1：強くそう思う		2：思う		3：あまり思わない		4：全く思わない		5：分からない	
Q３	「人間力講座」「サイエンス講座」を受講して、ためになったと思いますか？	15	8%	101	55%	47	26%	3	2%	17	9%

Q４	特に興味深かったのはどの内容でしたか？（3つまで回答可）	1：毎時間最初のﾒﾝﾊﾞｰのひとこと（ｱｲｽﾌﾞﾚｰｸ）	2：ﾍﾟｱｲﾝﾀﾋﾞｭｰ	3：心の四つの窓（自己開示とﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ）	4：書いて話を見える化（ﾌｧｼﾘﾃｰｼｮﾝｸﾞﾗﾌｨｯｸ）	5：ﾍﾟｰﾊﾟｰﾀﾜｰ
		19（10%）	28（15%）	18（10%）	10（5%）	37（20%）
		6：ﾜｰﾙﾄﾞｶﾌｪ	7：「ﾐﾗｲの授業」（文章）を要約して発表	8：一学期のまとめ（発表）	9：三条会商店街の地域調べ取材（ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ）	10：ｲﾗｽﾄﾏｯﾌﾟ・ﾀｳﾝ情報ﾊﾟﾈﾙのﾃﾞｻﾞｲﾝ作業
		28（15%）	2（1%）	4（2%）	68（37%）	18（10%）
		11：ｲﾗｽﾄﾏｯﾌﾟ・ﾀｳﾝ情報ﾊﾟﾈﾙのﾃﾞｰﾀ化	12：ﾌｨｰﾙﾄﾞﾏｯﾌﾟのｺﾝｾﾌﾟﾄｼｰﾄ作成	13：三条会商店街での展示とｲﾝﾀﾋﾞｭｰ先への報告・お礼	14：ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸのまとめと発表	15：一学期の大学生との関わり
		13（7%）	3（2%）	19（10%）	15（8%）	2（1%）
		16：ｸﾞﾛｰｶﾙｽﾀｯﾌとの関わり	18：担当教員との関わり	19：東郷先生の講演	20：特になし	
		6（3%）	1（1%）	48（26%）	15（8%）	

いる可能性があり、検討する必要性があるように思われた。また、東郷先生の講演が約 26％と高いことからもそうした傾向を読み取れることができる。

3. 2018 年度の取り組み

3.1　開講前準備

2018 年度は授業の直前ではなく、前週までにグローカルセンターが全授業担当教員に対して具体的な授業案を提示し（2017 年度までは授業開始 1 時間前まで担当教員は当日の授業の具体的な取り組み内容を知らなかった）、両者で論議の上で授業案を修正し授業を実施するという形で教員がより積極的に関わることを決めた。打合せ時間については、教員側に時間割編成や放課後の部活動指導といった規制があり、授業直前の 1 時間を除いて困難であり、授業後は参加可能な担当者のみとし、情報共有は Google Classroom で行った。情報の共有化と授業担当者全体の関わりをより強く目指した背景には、2018 年 3 月に「主体的･対話的で深い学び」が協調された学習指導要領が出され、2020 年度からの教育指針が明確に示されたことがある。高校では 2022 年度から学年ごとに段階的に実施されていく。「その新しい学びのスタイルに対応するための当校における先駆的役割かつ KSU コースの柱の授業」（4 月 4 日「人間力講座」担当者会議、山田亘副校長）として「人間力講座」は再出発することになった。担当者全員が授業に積極的に関わりをもつことを前提としながらもグローカルセンターとの窓口担当には、当時学内で授業づくり研究会を主催していた筆者と情報科の森本岳教諭（テクノロジーを活用して社会の問題を解決していく方法を探るイノベーション教育を展開）が担当することになった。授業担当者が例年担任を中心として入れ替わることから、年度当初の会議において、授業の目的・目標を以下の通りとすることを共有した（図 3）。

目的：2015 年の開講時のものをやや修正

変化の激しい時代において「人」と「人」との間に入り、自ら考え、課題を発見し、チームで解決する能力を養う

目標：2016 年からのものを踏襲

①生徒同士の関係の質を高める（教室内のコミュニケーション）

②（①で身につけた技法をもとに）学びの場を教室外に広げ、主体的に動く（教室外でのコミュニケーション）

③多様な情報をつなげて全体のつながりを考える（外側と内側とのつながりを発見）

図 3. 人間力講座の目的・目標

3.2　生徒同士の関係の質を高める

藤原（2014）は 21 世紀の社会を成熟社会と捉え、「もはや万人に共通する『正解』というものが存在しません。その代わりに、なるべく多くの関係者が納得できる解。つまり『納得解』を生み出しいく必要があるのです。」と述べている。第 1 回目の授業では、その考えを取り入れ、「人間力講座」が現在の生活や大学での学び、社会に出てからも通ずる学びにつながることを目指した授業で

あると説明した。その後、ミニゲーム、ペアインタビュー、ジョハリの窓、ペーパータワーの取り組みを通じてチーム内の関係の質を高める試みを行い、ファシリテーショングラフィック、ブレーンストーミング、KJ 法といったグループワークのスキルを磨く取り組みへと内容を移行させた。授業後には毎回、振り返りシートに記入させた。2017 年度までは質問項目ごとに枠を設けて書かせていた振り返りシートも項目ごとではなく、はじめに質問項目を箇条書きにし、罫線を引いただけのシートに 600 ～ 800 字程度で書かせることにした。それは質問項目が単体で存在しているのではなく、授業全体の振り返りのための 1 項目であることを認知させるためのものであり、振り返りシートが単なる感想文にならないための仕掛けであった。長文を書くことと学びの質とは比例関係にある。単なる感想文に終わらせずに当日の授業内容の確認とその過程を振り返り、何ができるようになったのか（取り組みの前後でどのような変化があったのかを認識すること）、何ができていないのか（理想と現実とのギャップを理解すること）を明らかにすること、毎回の取り組みが一連の取り組みの中の 1 つであることを文章化することで意識的に考えさせようとしたのである。具体的記述や論理的記述は自ずと長文となり授業内容の深化が図られることを意味するものであろう。

3.3　学びの場を教室外に広げ、主体的に動く

2016 年度、2017 年度の成果物と取り組み過程について一定評価しながらも継続して授業に関わってきた担当教員の中に生徒の意識が自分と社会とを結ぶものへと本当に繋がっているのかという疑問が生じてきた。ポスターをつくることがゴールであるはずはなく、生徒たちが多くの人との関わりの中でより幸福で平和な社会を創造することに寄与していける力を身につけることが授業の目的である。授業が生徒自身と朱雀共同計画の二方向の満足で終わっていないかという疑問が芽生えていた。こうした状況下、対象地域は生徒全体で共有でき、より生徒自身に馴染みがあると思われる校地周辺に改めることを決め、テーマは「地域に根ざした調査研究をした上で未来に向けて街を発展させていけるような高校生ならではの新しい提案をせよ」というミッション形式の課題に取り組むことにした。さらに過年度においてグローカルセンターが中心となり展開してきた授業の技法を、地域調査の手段として取り入れていくという方法へと、発想の転換を図った。

この発想の転換には大きな意味がある。「人間力講座」では人間関係の質を高めるための取り組みをしてきた。しかし、授業を離れた学校生活の場で、例えば学級活動や部活動の場でその学びが生かされることはあまりなかった。ブレーンストーミングや KJ 法等は、ホームルーム等で物事を決定していくときに役立つはずである。しかし、実際はそのようになっていない。つまり、生徒にとって「人間力講座」の時間は一過性の特別な場という認識なのであろう。授業で身につけたスキルが日常生活にも通じる生きる力であることを自ら分かって欲しいと思ったりもするが、これが現実であった。さらにあとで分かったことであるが、「人間力講座」で学ぶ生徒たちはすでに 1 年生時の「社会と情報」の授業においてこれらの技法を学んでいたのだ。永田（2018）は「引き出されることのない情報は果たして知識と言えるのだろうか。インプットされた情報は現実の場面で引き出され、活用されてはじめて意味を持つ。しまわれたままの情報は、価値としてはゼロである。その活用とは、必ず現実の場面での『応用』として、もとの形から何らかの変換を通してあらわれるはずである」と述べている。やや飛躍した解釈になるかも知れないが、これらのスキルは一度体験しアウトプットされなければ身につかないことは勿論のことだが、何度も繰り返して行われる中でその活用能力の質は高まっていくということ述べているように思われる。1 学期の後半から行われた地域調査では、その準備としてこれまでに取り組んできたワールドカフェの技法、ブレーンストーミングや KJ 法、さらに 1 年生時に「社会と情報」の授業で学んだスキル（ゴールデンサークル理論、PREP 法）を盛り込み行われることになった。

実際のフィールドワークに際しては、グループワークにより上記技法を用いて事前に「街に対する疑問」を精査し、実際にどこに行き、何を見てくるのか、そのための必要な準備は何かという計画書を提出させ、フィールドワーク後には手に入れた情報を紙面に落とし込んだ報告書を提出させた。その後、報告書をもとにポスターセッションを行ない（写真 4）、集めた情報の外化と課題の創出を図った。その後、他者から指摘された事柄について各チームで検討を行い、再度ミッションに対して何をどうすればどうなるのかという仮説を立てさせた。そして、その仮説の根拠となるより多くの情報を集めてくることを夏休みの課題として課し、1 学期を終えた。

2 学期はチーム会議とフィールドワークを含めた調査活動を繰り返して行い、①仮説（提案）、②提案の根拠（[理由（WHY）三方良し - 自分たち・

写真 4. 報告書を使用したポスターセッションの例

地域住民･社会 - を意識して］［手段（HOW）］［方法（WHAT）］）、③今後の方向性について PREP 法等を用いて確認する作業を繰り返し行った。途中、自分たちの考えている提案について中間報告会を行い、聞き手からの意見を参考にした上でブラッシュアップを図り、最終的に各チームが 5 分（質疑応答含め 10 分）でパワーポイントまたはポスターを用いたプレゼンテーションを行った。

報告された内容は「西本願寺周辺にインスタ映えする店をつくれば、より町は活性化するのではないか」「丹波口駅周辺でピクチャーラリーをして地域貢献」「演歌のカラオケ大会開催で島原に新しい人の流れをつくる」等であり、その体裁は提案、根拠等が述べられており、まとまっているものが多かった。しかし、その内容を見ていくと「高校生ならではの新しい提案」の多くがインスタ映え、イベント開催、人気店招致等であり、そのほとんどがすでに存在しているものであり、企業や行政では思いつかない「高校生ならではの」という視点は弱かった。また、「地域に根ざした調査研究をしたうえで」についていえば、例えばフィールドワークの結果として、「人がいない、道が狭い、街灯が少ない」ということを根拠に「危険な場所だから人の流れがない」と判断し、「灯籠を建ててお祭りを開催すれば、街は明るくなり、観光客や若者が集まる街になるのではないだろうか」という提案になってしまう等、「街を発展させていける」とは人を呼び込むこと、あるいは経済的に潤わせることという理解になってしまい、地域住人の視点は弱く、「三方良し」とはならないものが多かった。上記の「西本願寺の周辺にインスタ映えする店をつく」るという内容もその一例であろう。

2018 年度からは 1 月に 1 ～ 3 年生の進学コース、KSU コースに在籍する生徒を対象に「フロンティアスピリット」と題した一般参観も可能なプレゼンテーションコンテストを開催している。参観された方からは次のような感想をいただいており、企業関係者の感想からも地域を題材に自ら課題を発見する難しさを指摘する声が見られた（図 4）。一方、実際に取り組んだ生徒のアンケート結果（表 2）を見ると、前年度と比較して生徒同士の関係の質を高める取り組みより、学びの場を教室外に広げ、主体的に動く取り組みに対しての満足度が高いことに気付く。特にフィールドワークに対しての満足度が高く、その取り組み内容の質についてはすでに述べたとおりであるが、校外に調査に出かけ、課題解決策を考え、プレゼンテーションを行うという一連の取り組みに対して満足感を得ているが「人間力」を養うための外部との関わり方、地域を対象とした PBL 学習のあり方については検討する必要があることが明白となった。

①学年が上がると言葉の難易度もあがって説得力がありました。スライドの文字だけでなく動画もあったので飽きない上に分かりやすかったです。（生徒・1 年）

②スライドの作りから自分たちとは全然違うなと思いました。アニメーションの使い方もすごく上手だと思ったし、寸劇等も加えて説明が入っていたりして分かりやすかった。（生徒・1 年）

③このような会場でのプレゼン経験は生徒の大きな財産になるものでもっと盛大にやってください。（保護者）

④松原京極商店街等の地域を取り上げて頂いたこと、100 円の光源を使って地域の団体さんとワークショップを行い、地域との交流を図る取組等楽しく拝見させていただきました。 商店街にカフェを建てるのは無理でも、実際にカフェをされているところとのコラボや高校生のメニュー提案等、もう少し時間があれば実行に移せたかもしれません。（行政関係者）

⑤２年生もっと頑張れ！という気持ちになりました。２年生のステージ上での喋り自体は普通でしたが、内容の詰めの部分でやはり気になってしまいました。ただ、２年生の扱った、地域の話って、子供会や PTA、町内会等、住んでいる人達ならではの事柄で、外部からはパッと見ではわからない問題が結構大きかったりします（地域によって課題・問題は様々ですが）。経済的な話ではない組については、その辺りの事柄に着目できたらよかったのにとは思っていました（でもそれを扱うのは難しい）。たぶん、来年以降も同じような形で調査＆プレゼンするのでしょうし、そういう切り口も可能なら取り組んでもらえたら、と思っています。（企業関係者）

図 4. プレゼンコンテスト感想（一部）

表 2. 2018 年度高大接続アンケート（2 年）より

【全体】 ２３４件（無回答１名）

		１：強くそう思う		２：思う		３：あまり思わない		４：全く思わない		５：分からない	
Ｑ３	「人間力講座」「サイエンス講座」を受講して、ためになったと思いますか？	32	14%	121	52%	58	25%	9	4%	13	6%

Ｑ４	特に興味深かったのはどの内容でしたか？（3つまで回答可）	1：毎時間最初のﾒﾝﾊﾞｰのひとこと（ｱｲｽﾌﾞﾚｰｸ）	２：ﾍﾟｱｲﾝﾀﾋﾞｭｰ	３：心の四つの窓（自己開示とﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ）	4：書いて話を見える化（ﾌｧｼﾘﾃｰｼｮﾝﾌﾞｯｸ）	５：ﾍﾟｰﾊﾟｰﾀﾜｰ
		20（9%）	16（7%）	5（2%）	19（8%）	39（17%）
		6：ﾜｰﾙﾄﾞｶﾌｪ	7：アイデアの出し方（ﾌﾞﾚｰﾝｽﾄｰﾐﾝｸﾞ KJ 法）	8：地域の課題を解決するための調査	9：地域調べ取材（ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ）	10：提案の仕方（ｺﾞｰﾙﾃﾞﾝｻｰｸﾙ）
		22（9%）	8（3%）	35（15%）	67（29%）	14（6%）
		11：企画のまとめ方（PREP 法）	12：企画報告会	13：2 回のプレゼン	14：ｸﾞﾛｰｶﾙｽﾀｯﾌとの関わり	15：担当教員との関わり
		30（13%）	9（4%）	37（16%）	16（7%）	1（0%）
		１６：東郷先生の講演	１７：特になし			
		84（36%）	12（5%）			

3.4 多様な情報をつなげて全体のつながりを考える

３学期は例年あまり回数がとれず、十分な取り組みが行われているとは言い難いが、今年度は SDGs をとりあげ、その 17 の目標のうち自分の興味のあるものを１つ選び調査し、選択した課題に対して世界はどのように取り組んでいるのか、また自分はその目標を達成するために何ができるのかについて考え、チームで共有、発表することで、再構築された国際社会に対する問いを東郷先生に質問するという取り組みを行った。

アンケート結果（表 2）を見ると、昨年度に引き続いて生徒の満足度は高い。しかし、「人間力」を育成することを目的とする授業において単に質問し、答えてもらうという体験をするだけでは創造性を育めないのではないかという指摘があり、今後の３学期の取り組みに関しては検討課題となった。

4.「人間力講座」の取り組み（2019 年度）

4.1 取り組みまでの経緯

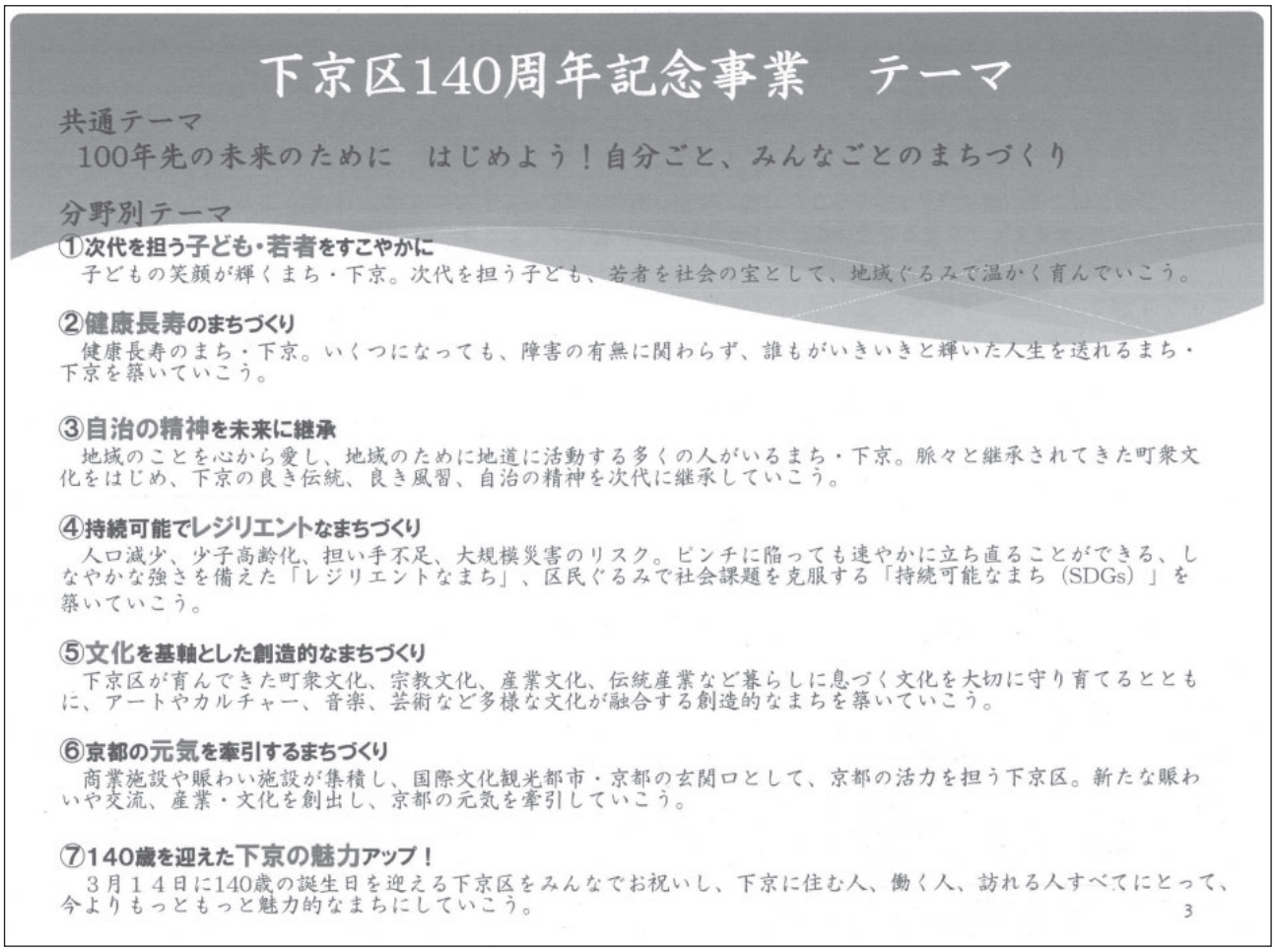
文部科学省は、新学習指導要領を踏まえ「地域との協働による高等学校改革の推進について（通知）」（2018 年 8 月 20 日、30 文科初第 483 号）にて、「地域には、それぞれ生きた課題が多く存在するため、生徒の地域への興味や関心を深め、地域の課題を探究する重要な機会を提供できる（中略）生徒にとって最も身近である地域と学校とが手を携えながら、体験と実践を伴った探究的な学びを進めていく必要がある」とし、「まち・ひと・しごと創生基本方針 2018」（2018 年 6 月 15 日閣議決定）においては、「高等学校が、地元市町村・企業等と連携しながら高校生に地域課題の解決等を通じた探究的な学びを提供する取組を推進すること等が明記されたところです。」と記している。こうした状況を踏まえ、2018 年度の「地域に根ざした調査研究をした上で未来に向けて街を発展させていけるような高校生ならではの新しい提案をせよ」という課題に取り組む傍らで、行政からのアドバイスをもらえないかと思い下京区地域力推進室を訪問した。その際、地域と連携し新しい人の流れをつくりだしたり、ベンチャー企業と連携し自己のキャリア形成と結びつけたりできると面白いのではないかという助言をいただいた。こうした意見も参考にしながら 2018 年度の取り組みは進められたが、すでに年度途中から高校生が該当地域をフィールドワークで訪れただけで、自ら課題を発見することは困難であるということが見え始めていた。「人間力講座」における学びの場を教室外に広げ、主体的に動く取り組みをより効果的なものにするために、学校が所在する下京区の役所や校地周辺に存在する京都リサーチパーク株式会社、彌榮自動車株式会社本社、京福電気鉄道本社、嶋原商店街振興組合等を訪れ、他校の実践にも学びながら、2019 年度に向けて具体的なイメージができつつあった 12 月に再度下京区役所を訪問し、2019 年度の取り組みは自ら課題を発見するのではなく、学校が所在する下京区や学校周辺にある企業、団体が抱える課題を提案し、生徒が解決策を提案する形式で実施することを決めた。民法改正により 18 歳が成人となることを目前に控え、生徒たちが社会を構成する一員であることを

自覚し、自分たちの取り組みが社会を変える原動力となり得ることを経験させることは行政や学校の役割であることから、PBL 学習のためのミッションは下京区長からのミッションという形で出すことを決め、下京区 140 周年記念事業の 1 つとして、「人間力講座」の取り組みを行うことにした。

4.2　事前準備（学習テーマの決定と環境の整備）

下京区も当校も年間を通じて協働で授業に取り組むのは初めてということであり、まずは他校における行政との取り組み事例を調査し、イメージの共有を図ったところ、下京区から 140 周年記念事業の 7 つのテーマ（図 5）をもとに PBL 学習のミッションを作成できないかという提案があった。

「100 年先の未来のために　はじめよう！自分ごと、みんなごとのまちづくり」という記念事業の共通テーマは、「私にとって、行政（企業）にとって、街（住人）にとって」住みやすいまちづくりを考えるという、「三方良し」となるテーマであり、かつ「来訪者（観光客等）にとって」という視点も盛り込めば「四方良し」となるテーマである。これまで「人間力講座」が抱えてきた課題であった発表者である私たちによる一方的な提案ではなく、より多くの人たちのために主体的かつ対話的な取り組みとして高校生が取り組めるテーマであり、「人間力」の育成に連なるものであると判断し、この提案を受けミッションを策定することを決めた。ミッション策定にあたっては、2 月上旬に下京区地域力推進室の方に来校していただき、2019 年度授業担当予定者（2018 年度 1 年生進学コース担任・学年部長、グローカルセンタースタッフ、森本教諭［情報科］、筆者［KSU 部長］）との間で、2 回にわたり、生徒たちにどのような「問い（ミッション）」を投げかければ「自分ごと、みんなごと」と考えることができるのかについて議論した。テーマ③「自治の精神を未来に継承」を例にあげれば、「自治とは何か」「地域のことを心から愛」するとはどういうことか、「地道に活動する多くの人」とは誰なのか、「下京の良き伝統、良き風習」とは何か、何のために「次代に継承してい」くのか、と授業担当予定者がブレーンストーミングを行ない、KJ 法を用いてまとめていった。



下京区140周年記念事業　テーマ

共通テーマ
100年先の未来のために　はじめよう！自分ごと、みんなごとのまちづくり

分野別テーマ

①次代を担う子ども・若者をすこやかに
子どもの笑顔が輝くまち・下京。次代を担う子ども、若者を社会の宝として、地域ぐるみで温かく育んでいこう。

②健康長寿のまちづくり
健康長寿のまち・下京。いくつになっても、障害の有無に関わらず、誰もがいきいきと輝いた人生を送れるまち・下京を築いていこう。

③自治の精神を未来に継承
地域のことを心から愛し、地域のために地道に活動する多くの人がいるまち・下京。脈々と継承されてきた町衆文化をはじめ、下京の良き伝統、良き風習、自治の精神を次代に継承していこう。

④持続可能でレジリエントなまちづくり
人口減少、少子高齢化、担い手不足、大規模災害のリスク。ピンチに陥っても速やかに立ち直ることができる、しなやかな強さを備えた「レジリエントなまち」、区民ぐるみで社会課題を克服する「持続可能なまち（SDGs）」を築いていこう。

⑤文化を基軸とした創造的なまちづくり
下京区が育んできた町衆文化、宗教文化、産業文化、伝統産業など暮らしに息づく文化を大切に守り育てるとともに、アートやカルチャー、音楽、芸術など多様な文化が融合する創造的なまちを築いていこう。

⑥京都の元気を牽引するまちづくり
商業施設や賑わい施設が集積し、国際文化観光都市・京都の玄関口として、京都の活力を担う下京区。新たな賑わいや交流、産業・文化を創出し、京都の元気を牽引していこう。

⑦140歳を迎えた下京の魅力アップ！
３月１４日に140歳の誕生日を迎える下京区をみんなでお祝いし、下京に住む人、働く人、訪れる人すべてにとって、今よりもっともっと魅力的なまちにしていこう。

3

図 5.　下京区 140 周年記念事業テーマ

担当教員からは「(高校生が考えられるミッションの策定が) なかなか難しい」という声を聴いたが、このグループ討議こそが教員の授業への参加意識をつくりだし、「人間力」を育み、チームで解決していくという行為そのものであり、実際の授業時に生徒がミッションに取り組み躓いた際のファシリテーターとして果たすべき役割に気付くことを期待したものであった。その後、3月中にミッション案（図6）が完成し、最終ミッションの確定は、1学期の授業を踏まえ決定することとした。

一方、様々な課題が見えてきた。2019年度2年生KSUコース社会系・国際系に在籍する生徒は約260名、7クラス編成となる。従来の同一時間複数講座設置という形で運用すれば、1講座あたりの人数は70名を超える。校内で定期的に使用できる大教室には限りがあり、担当者が目に行き届く生徒数も超えている。例年通りの運用では「フリーライダー」が増加することも目に見えている。従来の同一時間帯複数講座設置（月曜日5･6校時実施、クラスを解体、4校時に事前打合せ）という考えを改め、複数時間帯クラス別講座設置（月曜日3・4校時と5・6校時実施、学級単位、担当者全員による事前打合せを別日に1時間設定。会議の効率化を図るためGoogle Classroomを活用して事前に協議事項、質問等を共有）することを決めた。クラス別の運営が可能になったことで1チームあたりの人数が3～4人程度とグループワークをするのには適した数となり、パソコンも一人一台使用できる環境が整った。

4.3 生徒同士の関係の質を高める

第1回目の授業では、2018年度と同様これからの社会で必要とされる能力について話すとともにKSUコースにおける3年間の学びと「人間力講座」の位置づけについて明確にした。開講5年目にして、「人間力講座」は単に学校のカリキュラムに設置された一科目ではなく、学校として（KSUコースとして）どのようにして生徒を育てていくのかというカリキュラムマネジメントの観点から設置された講座として位置づけられた。1年生時の「社会と情報」の授業で身につけた「情報活用能力」「主体的に適応する能力」「チャレンジ精神と発想力」を、2年生時にはそこで生じた課題を解決しながらさらにレベルアップを図り、3年生時の授業「キャリアデザイン」や大学での学びに繋げていくという位置づけである。森本教諭は「学びのスパイラルアップ構造」「探究のスパイラル」という言葉で表現している（図7）。先述したが「学びはそこで留まるのではなく何度も繰り返して行われる中でその活用能力は高まっていくものである」し、その繰り返しの中で高校における学習は大学に続く学問の探究へと展開されていくものであろう。

授業は「人間力とは何か」について考える「マインドマップ」の作成をゴールとして、その過程で2018年度と同様の技法で「聴く、話す、質問

テーマ	ミッション	所管
次世代を担う子ども・若者をすこやかに	**親子の会話が増える参加型交流イベントを企画せよ** ⇒	子どもはぐくみ室 &(調整中)
健康長寿のまちづくり	**子どもも大人も笑顔になれて健康寿命を延伸する「手ぬぐいダンス」を考案せよ** ⇒しもけんずに取材し地域で健康づくりを推進することの意義を学ぶ。また，下京区は染めや絞りの職人が数多く所在するまちでもあり，そうした要素をPRするための手ぬぐいも活用する。	健康長寿推進課 &しもけんず
自治の精神を未来に継承	**地域の遺産を未来に継承していくためのPR動画を制作しYouTubeで公開せよ** ⇒中堂寺六斎念仏をＰＲする動画を制作し，YouTubeで公開する。〇〇万回再生などの目標を設定する。	広聴担当 &中堂寺六斎念仏
持続可能(SDGs)でレジリエントなまちづくり	**人や国の不平等をなくすため地域から変えられる(発信できる)アイデアを提言せよ** ⇒SDGsの理念を学び，いま生徒たちが身近なところからできる，世界をよりよくするアイデアをポスター展示する。12月の人権月間に合わせて開催される講演会で披露する。	事業担当 &京都信用金庫
文化を基軸とした創造的なまちづくり	**知られざる京都の名所に出会える観光コースを構築せよ(仮)** ⇒修学旅行生やインバウンドなどターゲットを設定し，下京の伝統的な建築物・景観を巡る観光コースを企画する。	彌榮自動車株式会社
京都の元気をけん引するまちづくり	**嶋原商店街の空き店舗を活用した今までにないお店を提案せよ(仮)** ⇒itonowaなどの成功事例を取材し，商店街全体にお客さんが訪れる魅力的なお店を企画する。	嶋原商店街振興組合
	新たに「梅小路京都西駅」が誕生した梅小路エリアの魅力を再発見せよ ⇒京都・梅小路まちづくり推進協議会と連携し，フリーペーパー・京都駅～梅小路公園エリアガイド『京都・梅小路FUN』の特集企画ページを編集する。	プロジェクト推進室 &京都・梅小路FUN
	京都リサーチパークを活用した高校生起業街を提案せよ(仮) ⇒KRPの創業オフィス，SOHOオフィスなどを活用し，ベンチャー企業が集うための企画を提案する。同時に自分たちの独創的な起業アイデアも提案する。	KRP
140歳を迎えた下京の魅力アップ	**シモンちゃん認知度向上大作戦を展開せよ** ⇒たわわちゃんなどの人気者を取材し人気の秘訣を学び，まだまだ認知度不足のシモンちゃんを動画やSNSなどあらゆる手段で盛り上げる。	企画担当 &京都タワー
	下京区へのふるさと納税を増やすためのアイデアを提案せよ ⇒京都・下京らしく，魅力的でオンリーワンの返礼品を企画する。	庶務担当

図6. 下京区から生徒へのミッション案

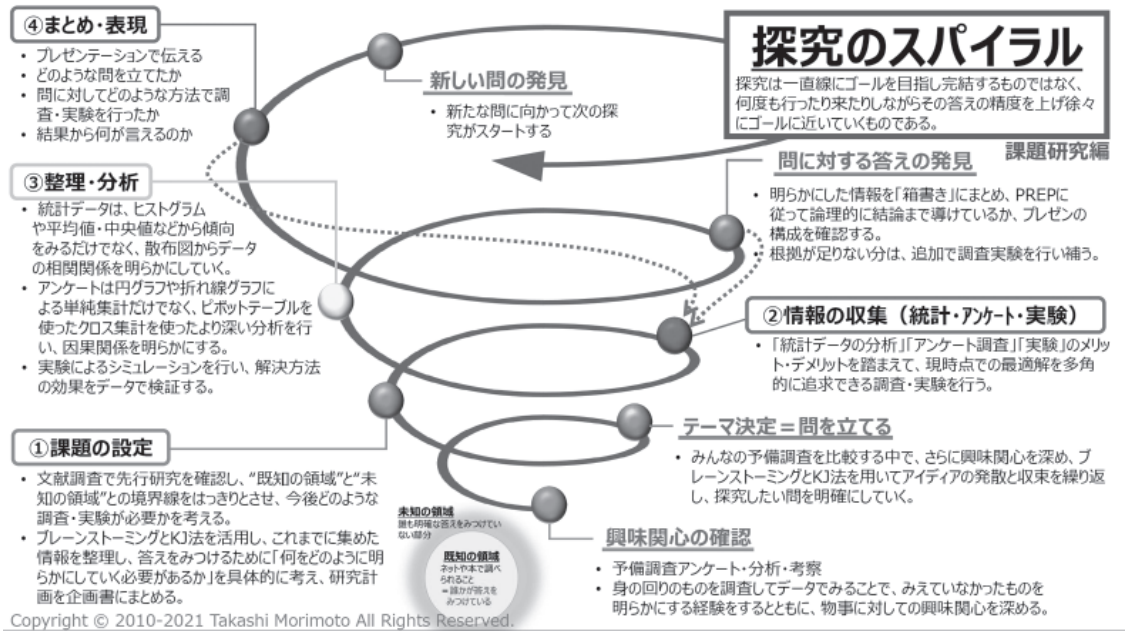


図 7.「学びのスパイラルアップ構造」、「探究のスパイラル」（森本作図。配付レジュメより）

する、答えを可視化する、協働でまとめる」という取り組みを行った。その後、作成されたマインドマップ（図 8）をチームで見直し、「人間力」を構成するうえで重要なブランチを 3 つ抽出する議論をし、1 チーム 5 ～ 10 分でクラス内発表（「表現する（外化する）」）を行った。

今年度は、授業後の振り返りシートの記入だけでなく、各回のレジュメや振り返りシートが挟み込まれたファイルを学習のプロセスを記したポートフォリオと捉え、各回の授業をまとめ、授業全体の取り組みを振り返る定期考査を実施した。チームあるいは自分自身の取り組みがどのように実践され、改善されていったのか、1 年生時の自分と比較してその成長が分かるように具体的に記すというメタ認知を目的とするものである。しかし、5 回分の授業のまとめとなれば自ずと長文になり、まとめる行為が作業化した生徒がいたことは否めない。また、採点は文章量を基本としつつ、内容を加味する形での評価としたために採点を作業と捉えた教員もいた。さらに「人間力」を題材としたために「人間力は評価できるものではない」「人間力は数値化できない」から全員の評価は同じで良いという意見までも表出し、評価をめぐって担当教員間では激論が交わされ、混乱が生じる一面もあった。それぞれの主張に納得するものもあったが、最終的に生徒自身が描く人間力とは何

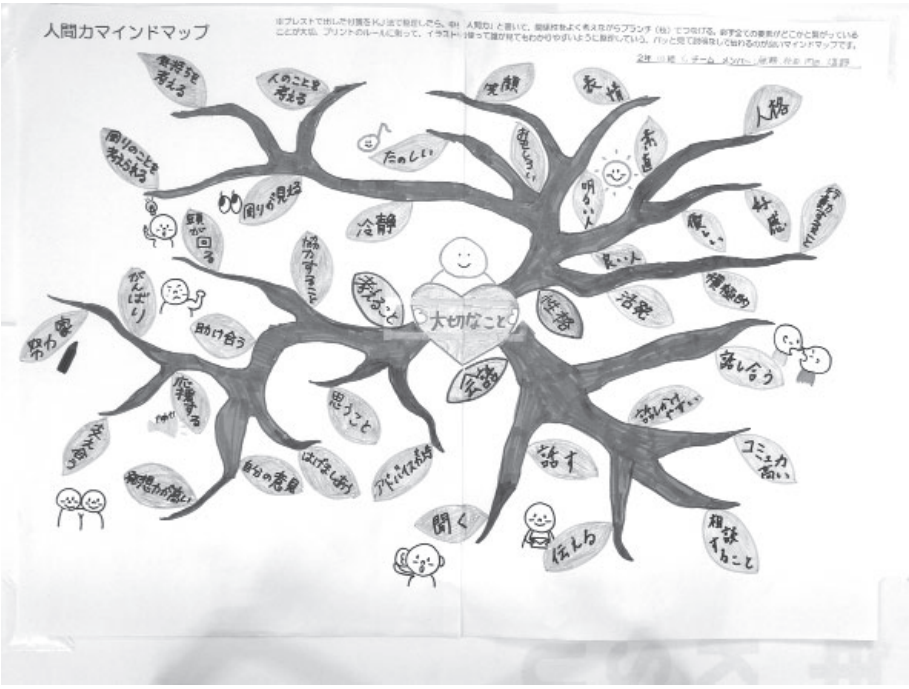


図 8. 作成されたマインドマップの例

か、良いプレゼンテーションとは何かについての視点を評価観点として抽出し、その理想状態に対して今の自分はどの位置にいるのかを把握できるルーブリック（図 9）を作成することにより、評価をつけるということは可能であると判断した。生徒にメタ認知をさせながら主体的に探究する姿勢を養うための評価と判断したのである。1 学期末の評価についても「量による評価」や「テーマや担当者が異なるものに対する評価」に対して白熱した議論が交わされたが、最終的には評価観点を明確にし、テーマごとに成績を算出し、全体でバランスを見ながら修正を行うという形で評価をつけた。

評価をめぐり混乱は生じたものの探究学習や人間の性質を題材としたテーマを取り扱う際の評価について、そもそも何のための、また誰のための評価なのかといった本質的な議論が起こったことは望ましいことであった。

4.4 学びの場を教室外に広げ、主体的に動く（1）

2018 年度の取り組みの反省から 2019 年度は地域の課題を自ら発見するのではなく、実在する課題に対して 18 歳を目前に控えた高校生を市民と見なして課題に取り組むことにしたのはすでに述べた通りである。1 学期の後半は、下京区長からだされるミッション調査を前に対象（図 6 中の所管）となる行政や企業、団体を訪問し、下京区 140 周年記念事業のテーマに沿いその業務についてまとめる取り組みを行った。単に見て、聴いて、まとめるだけの社会見学にならないように、事前にネット等で訪問先の調査をして、他の類似団体と比較させ、何が共通していて、何が違うのか等の質問を考え、インタビュー形式で行う企業訪問とした。

筆者が引率したチームは、下京区役所を訪れ、京都市役所行財政局に勤務されていた方から京都市の財政状況、ふるさと納税、京都市のふるさと納税について説明を聞き（約 30 分）、その後、インタビューの時間を設ける（約 30 分）という形式で行なわれた。事前にふるさと納税について、他の地域における取り組みについて調べていたこともあり、職員の方が述べた今後の京都市の対応策に対して、「他の地域でもやっており、宣伝不足の状況下、それで本当に改善するのか」と職員に迫る生徒もいた。生徒は京都市がこの制度により 29 億の赤字となっていることを知り、他人事ではなく京都で生活する一市民として切実な問題であると考えはじめたように見えた。2 学期から京都市のふるさと納税について考える予定であるこのチームにとって、今回の訪問は自分事の問題として考える動機付けに成功したように思えた。他の訪問先については、「ネットでは見つけられない多くの情報を得ることができた」「よく質問していた」「調査したものを声にだして質問することができなかった」といった報告を聞いた。企業等訪問後、各チームはインタビュー内容をまとめ、対象となった所管の方々にも来校していただきポスターセッションを行ない（写真 5）、1 学期を終了

人間力講座ルーブリック2019

年　　組　　番　氏名

	観　　点	C（２点）	B（３点）	A（４点）	S（５点）
マインドマップ	情報量・枝の多さ どれだけ多くの情報を組み込めたか。 マインドマップの枝をどれだけ細かく枝別れされられたか	ほとんど枝分かれせず、広がりがない。書かれているワードも少なく、空白が目立つ	大きな枝には分かれているが、小さな枝まで分かれずワードが少なく、空白が目立つ。	小さな枝に分かれてワードもたくさん描くことができており、空白がすくない。	全体的に枝が広がり、ワードも沢山描かれている。イラストなども沢山描かれていて、空白がほとんどない
	面白さ・ワクワク感 見た人の興味関心をどれだけ惹くことができるか。独創性・個性的な内容になっているか	文字と枝だけで、内容もありきたりで興味を惹かれない	独創的な意見が書いているが、奇抜な内容で興味を惹かれない	ありきたりな内容のワードが並んでいるが、組み合わせが面白く、説得力がある	独創的な意見が書いてあり、興味を引いて話を聞いてみたくなる
	色の多さ・カラフルさ どれだけ多くの色を使ってカラフルに描けているか	ほぼ単一の色で描かれており、カラフルさに欠ける	何色かは使われているが、カラフルとは言えない	枝には多くの色が使われており、カラフルにまとめられている	枝だけでなく、イラストなども見やすくカラフルにまとめられている
	分かりやすさ・文字の見さすさ 文字の大きさは適切か。 書いてある内容がまとまっているか	文字が小さく、すべて同じ大きさで見にくい	文字はある程度大きさはあるが、すべて同じ大きさでまとまりがない	文字の大きさに強弱をつけられているが、全体的にまとまりがない	文字の大きさに強弱があり、全体的にまとまっている
プレゼン	声の大きさ・目線・話すスピード・態度 はっきりと聞き取れるか、速さは適当か、堂々と聞き手を見て話しができているか	発表態度全体を大きく改善す る必要がある	視線、声量、話すスピードを 改善する必要がある	視線や声量、話すスピードと もに一定のレベルに達してい る	堂々と聴衆を見ながら声量も 十分に適切なスピードで発表 できている
	チーム力・まとまり しっかりと練習を行いスムーズに発表できるようにできているか	それぞれがバラバラでつながりが悪い、ぐだぐだである、誰か一人が話しているだけである	準備はしていたが、練習不足が感じられる	スムーズに発表できているが一部改善すべきところがある	練習もしっかりとしており、各メンバーが非常にスムーズに発表ができている
	熱意・聞き手があきない工夫・印象度 強調、抑揚、ジェスチャー、寸劇などを効果的に使って聞き手に伝えられるか	基本、棒立ち棒読みで、魅力や熱意があまり伝わらない	ジェスチャーや寸劇を取り入れているが、よく分らず内容がぼけている	強調、抑揚、ジェスチャー、寸劇を取り入れてプレゼンしている	強調、抑揚、ジェスチャー、寸劇を効果的に活用しており、とても熱いプレゼンである
	発表内容・PREP法 結論・導入・展開・結論の順にPREP法を意識しながら、発表内容がきちんと構成されているか	PREP法がきちんと用いられず、まとまりがない内容になっている。	PREP法が一応使われているが、明確でない。まとまりはないが努力のあとは見られる。	PREP法が使われており、それぞれの内容もまとまっているが、一つ一つ繋がりがない。	PREP法が使われており、つながりもスムーズであり、内容もまとまっていて分かりやすい。

図 9.　評価に活用したルーブリック

した。1 年生時の情報科の授業ですでに Google スライドに使い慣れている生徒たちはパソコンの前で着々と作業を進めていったが、40 名程の生徒が一斉にパソコンで作業する姿を見た教員の中から「対話の重要性を説きながらパソコンで作業するばかりでは、人間力は育たない」という声を耳にした。また、「生徒が楽しそうに作業しているようには思えない」という声も聞いた。しかし、生徒の実態はそうでないことは、後述のアンケート（表 3）を見れば分かる。生徒はテクノロジーを活用し、パソコン普及以前とは異なるコミュニケーションの世界の中で意思の疎通を図り、生活していることを実感させられる。作成したポスターはその後、下京区役所ロビーや京都産業大学むすびわざ館ロビーにて展示を行い（図 10）、「市民しん

写真 5.　ポスターセッションの様子

図 10.　むすびわざ館ロビーにおける展示の様子

【記述】5.「人間力講座」パネル展示について、ご意見・ご感想がありましたら、ご記入ください。
おもしろい
どれも目に付くもので非常にわかりやすい説明がきさいされておもしろかった。
近隣の事々　島原商店街、梅小路周辺から下京区役所内（下京区役所は随分歴史があるのですね。）こんな事も判って嬉しい。信用金庫で服を各国・地域へ届けて頂けるみたいなので、又伺って聞いてみたい。様々なニュースやら教えて頂いてありがとう　又下京区周辺の事や人々の息使い等、探って下さい（笑）
とても詳しく深いものがありおもしろかった。
各テーマがとても身近で興味を引くテーマにされており、入り込みやすい。高校生の視点ではあるが、一般にも受け入れやすく、現実的に考えられていると思いました。楽しく見させていただきました。
生徒が主体的にテーマを取り組んでいるものが良い。なぜこのテーマを調べようと思ったか、（このテーマでまとめることにしたか）を積極的に書いてほしい。
見やすくて面白いのが多かった。タクシーのが特によかったです。
たくさんのことが知れて良かった。
良かった
すごいと思った。
うらやましいと思った。
京都の伝統産業について調べていたのはいいと思う！！
図やグラフなどがあり、見やすく、分かりやすかった
とてもすばらしかった
少し大きくしたらいいと思います。
写真とイラストのバランスが悪いんじゃないか。
月曜日5,6限はちょっとしんどいです
もう少し花やかにしてください。
色々と多岐にわたり学ばれていて良かったと思います。今回の展示を足がかりにして、一歩学ばれると知識が深まり、学ぶ手法も増加すると思います。例えば梅小路公園。「朱雀の庭」は日本庭園の基本的なものを有した立派な庭園ですし維持管理も行っておられます。又市民の方々に樹木や草花野菜等の育て方を教えられ、京都市の緑化政策に対応されています。（ここが一番と記載されていましたので、展示外で色々学ばれたのでしょうね。）

【記述】6. 今後、中学生・高校生が取り組んだら面白いと思われる事柄がありましたらご記入ください
福祉の事柄は大事なので積極的にすることがいいと思います。
地域の歴史
伝統産業
もっと人間力をみがく

図 11. 来館者の感想

ぶん下京区版」でも紹介され、他者の目に触れる機会に恵まれた。むすびわざ館ロビーにおける展示では来館者から感想をいただいている。（図11）。

4.5 学びの場を教室外に広げ、主体的に動く（2）

2学期最初の授業で下京区長からのミッションがビデオメッセージで流された。各チームへと出された最終ミッションは次の通りである（図12）。

2学期の取り組みは相手先の都合もあり、統一した中間報告日等を設けることはできないため、取り組んでいるテーマごとに計画をたてて運用し、最終回に同時多発的にプレゼン大会を開催することを決めた。大会ではテーマごとに優秀賞を選び、1月に神山ホールで開催しているKSUコース主催の1～3年生合同プレゼンコンテスト（写真6）への出場権を得るという形にした。各チームの取り組み状況や担当者が抱える授業における不安等については、Google Classroomや週1回の会議の際に報告することで情報の共有化を図った。

筆者が担当したふるさと納税については、次のような手順で進めた（図13）。但し、筆者は実際の授業には関われていない部分がある。

中間報告会では区役所の方に来ていただき、次のようなコメントをいただいた（図14）。区役所の方々から課題発見から提案に至るまで全体にわたって具体的な指摘をいただいたことで、生徒は新たな課題に気付くことができた。

一方、作業過程について生徒のチーム活動に目を向けると「自分で進められる人に作業が集中してしまう場合やそれぞれが作業を一人で黙々と進めてしまう場合が見受けられた。どの作業が進んでいて、どの作業がすすんでいないのかを話し合った上で役割分担した場合とそうでない場合とで作業がチームのものになっているかそうでないかに差があると感じた」「リーダーの役割の認識が作業をリードする人になりやすいが、作業ではなく全員の関わり合いの度合いを上げるための働きがけができる人」という話を聞いた。PBL型の授業とプレゼンテーションいう行為を通じて人間力を高めようとしている本授業において、重要な指摘である。中間報告後には、インターネット上による再調査やフィールワーク調査によりさらなる情報収集に努め、チーム会議を開き、チーム内での役割を見直す等の行動が見られた。こうした手順を経て、次のような企画が出された（図15）。

生徒の取り組みへの満足度に関しては、2019年

テーマ	ミッション	所管
次世代を担う子ども・若者をすこやかに	**親子の会話が増えるような子育てイベントを企画せよ** ⇒小学生（高学年）と保護者をターゲットとし、例えば、親子共同作業による工作イベントを企画し工作物を作成。家に持ち帰った後でも親子の会話がはずむような企画を提案する。	下京区役所 子どもはぐくみ室
健康長寿のまちづくり	**笑顔になれる健康体操をかんがえよ** ⇒社会福祉法人　京都ミモザの郷のお年寄りと一緒に体操を考えて，実践してみる。	下京区役所 健康長寿推進課＆ 京都ミモザの郷 等
自治の精神を未来に継承	**地域の遺産を未来に継承していくためのPR動画を制作しYouTubeで公開せよ** ⇒中堂寺六斎念仏をＰＲする動画を制作し，YouTubeで公開する。	下京区役所広聴担当 ＆中堂寺六斎念仏
持続可能（SDGs）でレジリエントなまちづくり	**「自分ごと」から「みんなごと」に！京都信用金庫がバックアップをしたくなるような地域から社会を変えるソーシャルビジネスを起業せよ！** ⇒SDGsの理念を学び，ソーシャルビジネス（社会（地域）課題を、ビジネスという手法を使って解決することを目的とする事業）を考える。	下京区役所事業担当 ＆京都信用金庫
文化を基軸とした創造的なまちづくり	**知られざる京都の名所に出会える観光コースを構築せよ** ⇒修学旅行生やインバウンドなどターゲットを設定し，下京の伝統的な建築物・景観を巡る観光コースを企画する。	彌榮自動車株式会社
京都の元気をけん引するまちづくり	**嶋原商店街を活性化させるプロジェクトを提案せよ** ⇒空き店舗の活用，イベント企画，商店街マップ作成など商店街全体にお客さんが訪れる魅力的なプロジェクトを提案する。	嶋原商店街振興組合
	梅小路京都西駅周辺の魅力を繋ぎ新たな人の流れをつくるプロジェクトを提案せよ ⇒新駅周辺の”古き”と”新しき”に着目し、地域一帯の魅力を高め、独自のアイデンティティを打ち出していける街づくりを企画する。	下京区役所プロジェクト推進室＆京都・梅小路みんながつながるプロジェクト
	高校生ならではの発想で地域に活気が出て、未来に夢が溢れる仕事（会社）を考えて提案せよ ⇒ベンチャー企業が集うKRPのコンセプトを参考にしながら、学校周辺の地域をターゲットとして、これまでの仕事や会社の概念にとらわれず、地域や人を元気にする高校生ならではのアイデアを提案する。	京都リサーチパーク（KRP）
140歳を迎えた下京の魅力アップ	**シモンちゃん認知度向上大作戦を展開せよ** ⇒たわわちゃんなどの人気キャラの秘密を探り，まだまだ認知度不足のシモンちゃんを動画やSNSなどあらゆる手段で盛り上げる。	下京区役所企画担当
	下京区の魅力を発見し（下京区の資源を活用し），京都市へのふるさと納税を増やすアイデアを提案せよ　京都市への寄付額を増やすために，下京区の魅力を再発見または新たに創出し、返礼品やその宣伝方法を考える。	下京区役所庶務担当

図 12.　ミッション一覧

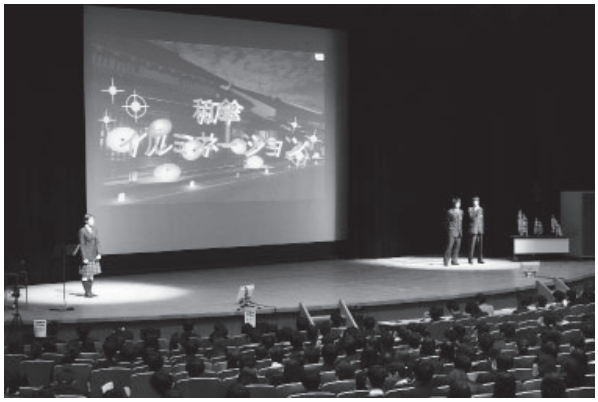


写真 6.　プレゼンコンテストの様子（神山ホール）

①ミッション動画の視聴
②チームで取り組む意義を確認（ブレーンストーミング、KJ法、発表）
③ミッションの解析
・主題：京都市への寄付額を増やすために返礼品やその宣伝方法を考える
・条件：下京区の魅力を再発見・創出する
・ふるさと納税の提案に対する前提条件は、①ふるさと納税制度に伴う京都市の税収は29億円の赤字であり対応策を考えている。②京都市は京都に足を運んでもらえることを目的とした返礼品を考えているという２つである。
④情報収集（インターネットやフィールドワーク）、分析
⑤課題の背景や原因の明確化（最低３個）、アイデアの創出（最低5個）及びアイデアを絞り込み
⑥仮説と検証（を繰り返す）。疑問点は区役所の担当者に質問する。継続して調査をする。「4方良し」の視点確認
⑦まとめ（骨子をまとめたラフなもの）
⑧中間報告会（ダメ出し会。よりよいチーム、プレゼンとなるために批判的に聞く。批判的にコメントする）
⑨報告後の新たなる情報収集、分析、仮説、検証とまとめ。チームとしての機能の確認。
⑩スライドへの落とし込み（発表用パワーポイント作成）
⑪リハーサル
⑫プレゼンテーション、振り返り

図 13.　取り組みの手順

度末に実施したアンケート結果（表 3）で確認することができる。「講座を受講してためになったと思いますか」という問いに対して、「強くそう思う」「思う」という回答が併せて約 78％あり、生徒が肯定的に受け止めていることが分かる。過去 3 年間において満足度は一番高い。加えて、生徒同士の関係の質を高める取り組みと学びの場を教室外に広げ、主体的に動く取り組みに対しての満足度の比重に偏りがないことも分かる。担当教員からは ICT 機器の利活用が重視され、人間の関係の質が軽視されているという声も聞いたが、教員の印象と生徒の印象とはアンケート結果を見る限りにおいては非対称的である。昨年から取り組みはじめた SDGs の取り組みについての満足度も高いが、全 3 回のみの取り組みであり、分析するだけの情報をもちあわせていないため、紙面の関係もありここでの紹介については省略する。

①提案が市民に向けた一方通行のモノになっている。
②情報が古い。
③現状は魅力がないというが比較の対象が明示されていない。
④課題と提案が抽象的で具体策にかける。
⑤納税の基本的な部分に理解不足がある。

図 14. 中間報告会におけるコメント（一部）

①合婚ツアー（合コン・婚活 縁結びツアー）
下京区にある水族館、鉄道博物館、京都タワー、西本願寺、河原町等の魅力あるスポットをアピールし、出会いを求めている人を呼び込むという提案
②和菓子と鉄道でつくる京都
下京区には和菓子屋がたくさんあり、老若男女、国籍を問わず人気が高い。また鉄道博物館があり、鉄道好きな人は一定数存在する。和菓子体験や体験キットをつくり伝統ある京都の和菓子文化を紹介したり、全国に数少ない鉄道博物館を紹介することで京都に人を呼び込むという提案。

図 15. 企画の例

5. 到達点と課題

2015 年度に開講した「人間力講座」は 2019 年度をもって一区切りをつけ、2020 年度からは学内に新たに教科を横断して設置された探究科によって運営されることになった。探究科の設置はこれまでの「人間力講座」の取り組みの成果と課題を中心に成立している。本文中に各年度の成果と課題については述べてきたが、最後にもう一度これまでの取り組みにおける課題をまとめておく。

第 1 に「人間力」という多様かつ複雑で数値化しにくい力をどのように理解し、育成していくのかという問題である。人間が多様、複雑かつ高度ならば、どんなにテクノロジーが発達したとしても AI が人類を超えるということが語られることはないだろう。シンギュラリティーが社会不安をつくりだす昨今において、人間の価値（「評価」）について議論していくことは重要なことであるように思われる。

第 2 に PBL 型の授業における問いの設定の問題である。課題解決型授業の課題設定を生徒自らが行う際には社会経験値の低い生徒には少々困難な面がある。（一方で社会性を高める可能性を秘めているとも考えられる。）生徒の興味を惹き付け、学習意欲を喚起するものであり、結論が自分自身、相手、社会の「三方良し」となり、その調査過程

表 3. 2019 年度高大接続アンケート（2 年）より

【全体】 ３０８件

		1：強くそう思う		2：思う		3：あまり思わない		4：全く思わない		5：分からない	
Q３	「人間力講座」「サイエンス講座」を受講して、ためになったと思いますか？	43	14%	197	64%	53	17%	10	3%	5	2%
Q４	特に興味深かったのはどの内容でしたか？（3つまで回答可）	1：毎時間最初のﾒﾝﾊﾞｰのひとこと（ｱｲｽﾌﾞﾚｰｸ）		2：人と話す、人の話を聞く上で大切なことが何かを考える		3：人に質問する（オープンクエスチョン）技法を学ぶ		4：ﾌﾞﾚｰﾝｽﾄｰﾐﾝｸﾞ及びKJ 法を用いて視覚的に思考を共有する技法を学ぶ		5：マインドマップを用いて表現する技法を学ぶ	
		52（17%）		84（27%）		30（10%）		17（6%）		23（7%）	
		6：PREP 法を用いて効果的に相手に伝える技法を学ぶ		7：ﾙｰﾌﾞﾘｯｸを作成し理想と現実とのｷﾞｬｯﾌﾟや（略）指標作成の技法を学ぶ		8：マインドマップを用いての発表		9：インタビューの検討（行政、企業等訪問のための準備		10：行政や企業等を訪問し、インタビューを行う（1 学期）	
		20（6%）		14（5%）		14（5%）		16（5%）		37（12%）	
		11：ポスターセッション（人間力とは何かについての発表）		12：行政や企業等を訪問し、社会で活躍する人とつながる（2 学期）		13：中間報告会を行い、生徒により相互評価や第三者による評価		14：フィールドワークやパソコン等を用いたプレゼンに向けた調査活動（2 学期）		15：プレゼンに向けた視覚化作業	
		28（9%）		45（15%）		14（5%）		42（14%）		57（19%）	
		16：プレゼン		17：SDGs の取り組み		18：担当教員との関わり		19：特になし			
		74（24%）		92（30%）		8（3%）		18（6%）			

が生徒自身による意志決定、判断に委ねるものになるように仕掛けを作っていくことも必要な場合がある。

第3に評価の問題である。生徒のメタ認知やモチベーションを高めるための手段として、評価軸を示すことは重要であるが、その評価軸を固定化することに問題はないのだろうかという問題である。西岡（2016）は、評価観点や評価方法を明確にする学力評価計画を立て、その計画を評価するための視点として、「妥当性（評価したいものを、本当に評価できているのか）」「信頼性（どの程度、正確に評価することができるのか）」、「公平性（平等性、結果妥当性）（条件の明瞭さ）（基準）（公表と承認の原則）」「実行可能性（限られた条件内で評価対象者を評価できるか）」をあげている。また、文部科学省は『学習評価の在り方ハンドブック高等学校編』（2019年）で「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に取り組む態度」の評定に加えて、「個人内評価」をとりあげ、観点別や評定では示しきれない個々の生徒の可能性、進歩の状況についても評価することを示している。

第4にICTの利活用と非活用の問題である。パソコン中心の作業になると資料作成の進捗状況は見えやすくなるが、作業に至る過程のなかで話し合ったことや考えたことが見えづらくなる傾向があった。また、パソコンの活用により作業の効率化が図られる一方で、手間隙がかかる調査が省かれ、図書館や資料館を訪問したり人を訪ねたりすることで偶然見つかる新しい事柄が失われる可能性がある。

第5に教師の役割の問題である。守屋（2000）は、教師は「教えたいことを学び手自身が結論として導きだすような思考活動へと学び手を触発することによって助けることができたなら理想である」と述べている。しかし、その「理想」が実現できない、すなわち「学び」への具体的動機付けができない（課題設定ができない）、研究計画が立てられない、考察ができない生徒への介入は必要であり、担当する教員の知識とスキルに大きく依存することになる。そのため教師は教科の専門性とともにコーチングやファシリテーション技術を学ぶ必要性がある。

最後に情報共有のあり方の問題である。とにかく教師は忙しい。生徒もまた忙しい。全員が揃って十分な打合せをする時間がないという前提の中で物事を決定していかなければならない。メモやGoogle Classroomを用いて「伝えた」ことが、「（伝えたいメッセージとして）伝わっていない」ということがよくあった。

近年多くの大学において学び方を学ぶ講義が開講され、高校では人と人との良好な関係を築くための取り組みがなされている。こうした状況下、「人間力講座」は人と人とがつながり、人と社会とがつながる「人間力」の育成を目指し、さらに大学での学びへとつながる授業を目指してきた。特に課題を設定し、情報を収集して、考察（整理・分析）するという行為を通じて、原因の解明や新しい価値を創造する（まとめ、発表する）というPBL型の授業実践により大学での学びにつなげようと考えてきた。また、対話とテクノロジーを活用することにより創出される新しい教育の可能性を探ろうとしてきた。「人間力講座」の取り組みを通じて、メタ認知力やチームー力、課題解決能力やプレゼンテーション能力が育まれたと思うが、その実を言えば、卒業生自身や京都産業大学を中心に大学で卒業生と関わっている教職員の方々に尋ねるほかに術がない。

謝辞

2019年度の取り組みに当たり下京区役所の熊本秀人氏、熊切英司氏、入江雄介氏、松田泰典氏（現在は京都市役所）、嶋原商店街振興組合の木村裕一氏（乙文）、彌榮自動車株式会社の深見宜隆氏、熊谷保氏、京都リサーチパーク株式会社の足立毅氏には、授業へのご理解、ご協力をいただきました。また、むすびわざ館における展示にあたっては京都産業大学ギャラリーの川上万尋氏にご指導とご協力をいただきました。この場をお借りし、心より御礼申し上げます。

注

1）本校における高大接続授業は、本学大学教員が授業を担当し、高校教員は授業の出欠管理、聴講及び授業態度の確認を行う。内容は「大学の歴史と京都産業大学」や「各学部での学び」とし、評価はその都度だされる課題や最終時間に実施する考査、授業ノート等によって算出する。尚、本校KSUコースは外国語学部等へ進学を前提とする国際系、法学・経済学部等への進学を前提とする社会系、理系の学部への進学を前提とする理工系からなる。

2）高等学校学習指導要領で「学校においては、生徒や学校、地域の実態及び学科の特色等に応じ、特色ある教育課程の編成に資するよう（中略）これらに属する科目以外の科目を設けることができる。」と述べている。（文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」）

3) グローバルな視点で世界基準の意識を持ちながら、軸足を置くローカルの目指すべき社会の未来を自ら考える、世界を見据えながら地域経済・社会の持続的な発展に情熱を注ぎ、活躍する「グローカル」な人材を育んでいきたい。グローカル人材開発センター（以下：略称 グローカルセンター「GC」）は、そのような想いに共感する京都の大学、経済界、行政機関等がタッグを組み設立された認定 NPO 法人です。（「グローカル人材開発センターホームページ」より引用、2021 年 11 月 26 日閲覧）

参考文献

藤原和博（2014）藤原和博の「創造的」学校マネジメント講座「マネジメント」で学校と地域を動かし活かす．教育開発研究所，東京

溝上慎一（2004）学生の学びを支援する大学教育．東信堂，東京

森本岳（2010）社会と情報・探究 . 京都産業大学附属高等学校，2016-2021 の授業資料

守屋慶子（2000）知識から理解へ - 新しい「学び」と授業のために．新曜社，東京

永田和宏（2018）知の体力，新潮新書，東京

西岡加名恵（2016）教科と総合学習のカリキュラム設計 - パフォーマンス評価をどう活かすか．図書文化社，東京

Practical report of *Ningenryoku* classes at Kyoto Sangyo University Senior High School: Aiming to improve the quality of interpersonal relationships, problem solving and presentation skills

Kenji NAKAO[1]

This paper is a summary of the practices used in the *Ningenryoku* class at Kyoto Sangyo University Senior High School between the 2015 and 2019 school years in Japan. The *Ningenryoku* class was developed to connect students to learning which will take place at university and to cultivate an attitude of “facing the unknown to make our dreams come true.” *Ningenryoku* represents “the power of connections” and “the power to act” for students to build their ability to overcome problems and actively contribute to the betterment of society. The program is structured to cultivate the students’ views of employment and public society while developing their critical thinking skills through collaborative and project based learning with emphasis placed on independent and student-centered learning which connects university learning and modern society.

KEYWORDS: Interpersonal relationships, Regional cooperation, Social cooperation, Project based learning, Collaborative learning

2021 年 12 月 22 日受理

1 Kyoto Sangyo University Senior High School